



# 御嶽山 火山防災だより



## ◆昭和 54 年の噴火について◆

御嶽山では、昭和 54 年（1979）10 月 28 日午前 5 時 20 分に、<sup>けんがみね</sup> 剣ヶ峰南側の<sup>じごくたに</sup> 地獄谷上流部で噴火が発生しました。この時の噴火は、マグマの噴出を伴わない<sup>すいじょうきふんか</sup> 水蒸気噴火と言われるものです。噴火で生じた火山灰は火口周辺で 50cm 以上積もり、群馬県の前橋でも降灰が観測されました。この噴火では 400m に渡り 9 箇所の火口が形成されました。

昭和 54 年（1979）噴火では名古屋大学が、<sup>まきお</sup> 牧尾ダムに設置していた地震計が、噴火前の地震活動の活発化を捉えていました。つまり、観測の充実を図ることによって、噴火活動をモニターできる可能性が示されたと言えます。その後、御嶽山では観測網が整備されてきました。

なお、御嶽山の昭和 54 年の噴火は、火山学上重要な意味を持つ噴火でした。御嶽山では噴火前まで、一般的に死火山と考えられており、昭和 54 年の噴火はその常識を破るものでした。このため住民のみならず、火山学者等の専門家への影響も大きく、御嶽山の噴火を契機に死火山、休火山の言葉は用いられなくなりました。次の写真は、14 号の「御嶽山と人」で紹介した田中さんが噴火当日の午後と 12 月頃に撮影した貴重な写真です。

## 御嶽山のめぐみ ⑮

古くから御嶽山は、温泉の恵みをもたらしてくれました。

むかしむかし、王滝村の<sup>ふたごもち</sup> 二子持（牧尾ダムの右岸）というところに「せどおねの湯」という温泉が湧き出ており、多くの旅人が疲れを癒しました。そのうち<sup>せびい</sup> 侍やお代官が来るようになると、そのお世話が地元の負担となりました。村びとはいっそうのこと、こんな湯などなければいいと思うようになり、ある日こっそりと<sup>うし</sup> 牡牛 1 頭、<sup>おしどり</sup> 雄鶏 1 羽をいけにえにして、湯口に埋め、湯道を断ってしまいました。それからは、湯と死骸から出る<sup>あくしゅう</sup> 悪臭で、ここに来る小鳥やけものまで倒れるほどだったというおはなしが残っています\*。

また、地元の方のおはなしによると、牧尾ダムの近くにあった昔の森林鉄道跡に、火山ガスがでていたところがあったそうです。

もしかすると「せどおねの湯」のおはなしは、危険な場所を知らせてくれる昔の人の知恵だったのかもしれないですね。



\*「せどおねの湯」は、「信州の民話伝説集成 中 信編」を参照。



王滝村 田中秀夫氏撮影（左：昭和 54 年 10 月 28 日午後、右：同年 12 月頃）

## 御嶽山と人

おんたけアドバンチャー代表

## 二宮隆博さん



学生の時、御嶽山に子どもたちのキャンプツアーのアルバイトで来て、山深い場所という特殊な自然環境の中で身をおいている感じが気に入り、こちらに来て、もう 18 年になります。自然湖でのカヌーツアーをやっているシーズン中、緑いっぱいの新緑や標高差によって段階的に楽しめる紅葉など、季節の移り変わりを感ずることが出来ます。

自然湖が地震で発生した土石流によってせき止められてできた生い立ちを、お客さんには絶対に伝えています。自然の恐ろしさってというか大きな動きってというのは、自然の恵みと一緒にのもの。それが起こったからこそ、今の不思議な風景の地形があるってということを感じてもらえればいいですね。

今、川に流れている流木の問題もありまして、御嶽湖は流木がすごくたまるとすごいい香りがするぐらい、中はしっかりしているんです。火のモチは悪いといわれているので薪ストーブに使っている家庭はないんですけど、ただ焚火で燃やす程度には雰囲気がいいんですよ。山奥の冬の寒く静かな空気感の中で、流木を使って焚火を楽しみ、地元の食材を調理して食べられる「焚火浴<sup>®</sup>」という形のイベントも考えていて、いろんなつながりができて地域がよくなっていくといいかなあとと思います。

自分で事業をやっている責任を持って御嶽山の自然を活用していけたらと、こんな山奥だからこそすごく静かなわけですから、魅力としてアピールできるようにやっていけたらと思っています。

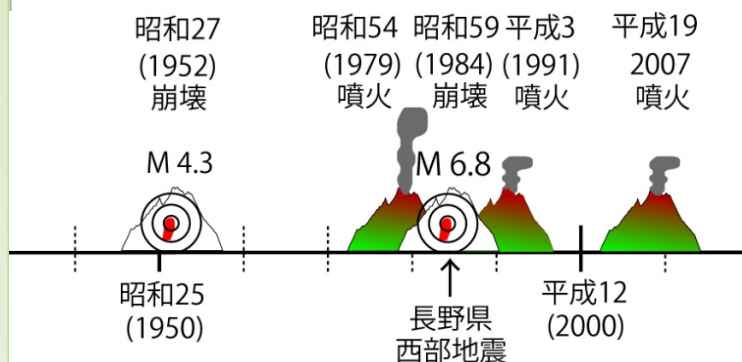
## ◆昭和27年の崩壊◆

御嶽山の地震による崩壊といえば昭和 59 年（1984）の「御嶽崩れ<sup>おんたけくずれ</sup>」が知られていますが、昭和 27 年（1952）にも地震で崩壊があったことが判明しています。この時の様子は、島田の著書<sup>\*1</sup>に記録されています。昭和 27 年 5 月 18 日に王滝村三浦付近の地下 20 km を震源とする M=4.3 の地震が発生しました。この時、王滝川上流にあった（旧）濁川温泉<sup>にごりがわ</sup>では、揺れが激しく、湯殿の湯が止まり、湧出口の色が変わったといわれています。また、濁川で立木伐採中の人夫が倒木のため圧死する被害が生じています。この地震と同時に濁川源頭部の地獄谷<sup>じごくだに</sup>では規模の大きな崩壊が発生し、崩壊土砂のため川の合流点が、1.5 km 程上流に移動したとされています。多治見砂防国道事務所では 2 時期の旧版地図<sup>\*2</sup>を比較することによって、合流点が移動したことを確かめています。御嶽山では昭和 59 年の長野県西部地震以前にも地震による災害が発生しており、火山活動とともに注意してゆく必要があります。

\*参考図書

- 1 島田（1982）：御嶽山 地質と噴火の記録、千村書房。
- 2 多治見砂防国道事務所（2003）：資料集御嶽崩れ。

## 《 御嶽山での主な噴火・地震の履歴 》



既刊はこちら↓（多治見砂防国道事務所HP内）

<http://www.cbr.mlit.go.jp/tajimi/sabo/ontake/ontakesan.html>

国土交通省中部地方整備局 多治見砂防国道事務所

〒507-0023

岐阜県多治見市小田町4-8-6

砂防調査課

TEL：0572-25-8020（代表）

FAX：0572-25-7994

E-mail：tajimi@cbr.mlit.go.jp

協力：王滝村・木曾町・高山市・下呂市